

日本の舞踊学と舞踊教育への貢献

猪崎 弥生

私が松本千代榮先生に初めてお目にかかったのは、お茶の水女子大学入学試験における表現体育学専攻の実技試験のときであった。入学してからは、フィルム映像を使いながら溢れんばかりの熱い想いを注ぎ込んでくださった「舞踊論」の授業が強く印象に残っている。また、大学院での修士論文の審査の際、「よく勉強したことはわかりますが、そこからもっと考察を深めてください」という厳しいお言葉を頂いたことは、以後私の研究上の指針となった。大学教員になってしばらくは、「全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）」において、大会会長であった先生のお姿を遠目で拝見するだけであったが、時々お声をかけて頂けることを嬉しく思ったものである。

2006年4月1日にお茶の水女子大学舞踊教育学コースの教授として着任してからは、音羽のお宅に時々お訪ねする機会を持つことができた。その際、奈良女子高等師範学校附属小学校での授業実践や研究に関するお話を伺えたことは、実に幸せな時間であった。その経験を含めて、松本千代榮先生（以降、松本とする）のこれまでの功績を簡単ではあるが辿ってみたい。

松本は奈良県五条市に生まれた。1952年東京教育大学（現筑波大学）専任講師として赴任、1960年同助教授、1963年同教授（舞踊学講座）に昇格した。お茶の水女子大学には、体育専攻を「表現体育学」として再建するため、1971年に着任。1973年には修士課程に「舞踊教育学」専攻が認められ、1982年「舞踊教育学科」の設置が実現した。また1988年には神戸市からの要請により「全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）」を創設している。

松本が果たした大きな貢献のひとつは、それまでの既成のダンス教材を学ばせる指導法に替わり、生徒が自らの動きを創り表現する創作ダンスを体育に位置づけたことである。1947年に学校体育指導要綱の起草委員に選ばれ、体育の中に作品創作、作品鑑賞、表現技術の三つの柱で構成されるダンスの領域を設置した。日本の学校教育の中で創作ダンスを教えたのは、松本が最初である。その原点は1941年に奈良女子高等師範学校附属小学校に赴任した際、そこで行われていた自発的活動を重視する教育法である「合科学習（Project Method）」に驚かされ、そこから自らのダンスに

おいてさまざまな模索をし、創造的身体表現活動としてのダンスを創り出した。その経験が以降のダンス授業研究につながったのである。

もうひとつの大きな貢献は、Margaret N. H. Doubler（1889-1982）の舞踊学を日本に紹介したことである。ドゥブラーはアメリカの大学における舞踊コースでダンスを実践する傍ら、舞踊の理論的研究を進めており、松本は大学で創作ダンスの指導法を教えながら、その研究から見出された問題を実証的に探究した。松本はドゥブラーが1940年に著した『Dance: A Creative Art Experience』を読んだとき、「自分の考えと大変よく似ていると思った」ことを追想している。1974年にはそれを邦訳し、『舞踊学原論：創造的芸術経験』として出版した。

さらに、松本の研究の中で最も舞踊学の理論的基盤を構築することに貢献した研究は、次の三つではないかと思われる。一つは、舞踊における動きの運動特性とその動きが有する表現性についての研究である。その初期のものは、舞踊において運動とイメージが連動していることを明らかにするものであり、ダンス授業研究を大きく前進させた。二つ目は、映像からモーションアナライザーを用いてさまざまな舞踊の動きを分析した研究のうち、インドのプルリア地域で踊られている動きの特徴を作品の特性として導き出した「運動表現の民族的特性に関する研究Ⅳ：インド仮面舞踊劇—CHHAU—」である。この研究は、白石踊や舞楽の研究などのように、舞踊における文化の構造を目に見えるかたちにしてその特徴を明らかにした試みであると高く評価された。三つめは、舞踊の動きは表現のために美的変形がなされ、「力性」「時間性」「形態性（ラバンの「空間性」にあたる）」と「創造性」によって決定されるとしたことである。これらを始めとした松本の研究と実践によって日本の舞踊学と舞踊教育学が大きく発展したことは言うまでもない。

最後に、松本千代榮先生がこれからの舞踊学に対して残されたお言葉を記し、謹んで哀悼の意を表したい。「舞踊は人間の感情と社会をつなぐ発露である。一人が踊り始めると誰かに伝わり、舞踊は人間の連帯をつくる。言葉が生まれる前から、踊ることは存在していた。人間の存在自体が舞踊の存在を示すものである。」